寺床谷古墳

中国電力島根原子力発電所 内カネ谷フェンス設置工事に伴う調査

２００４年１２月

島根県 鹿島町教育委員会

寺床谷古墳

中国電力島根原子力発電所 内カネ谷フェンス設置工事に伴う調査

目 次

例言
1 …… Ⅰ．調査の経緯
2 …… Ⅱ．位置と歴史的環境
4 …… Ⅲ．調査の概要
7 ……付　深田土捨場予定地試掘調査
11 …… Ⅳ．小結

例　　言

1．本書は、平成16年度、鹿島町教育委員会が中国電力株式会社島根原子力発電所の委託を受けて実施した寺床谷古墳の発掘調査の記録である。

2．調査は、電力島根原子力発電所３号機増設計画に伴う内カネ谷土捨場フェンス新設工事に伴って行った。

3．調査地は、島根県八束郡鹿島町大字御津字寺床谷2032－１番地に所在する。

4．調査は、平成16年７月21日から７月30日までをかけて実施した。

5．調査体制は以下のとおりである。

事　務　局　　古瀬　篤（鹿島町教育委員会教育次長）
調 査 指 導　　東森　晋（島根県教育庁文化財課）
調　査　員　　赤澤秀則（鹿島町教育委員会文化振興係長）
作　業　員　　安達善也、川谷恵六、山本晴雄
調 査 協 力　　徳永　隆、徳永桃代、川西　学（以上、鹿島町教育委員会）
内 務 作 業　　中島美喜子（鹿島町立歴史民俗資料館）、丹羽野輝子、瀬田明子

6．現地での調査にあたっては、株式会社佐藤組の協力をいただいた。この場を借りて厚くお礼申し上げます。

7．平成12年度に中国電力株式会社島根立地調査事務所（当時）の委託で行った島根原子力発電所３号機の増設計画に伴う深田土捨場予定地での試掘調査の記録を併載した。

8．この調査にかかる写真、図面等の記録は、鹿島町立歴史民俗資料館において保管している。

Ⅰ．調 査 の 経 緯

平成12年８月、島根原子力発電所３号機の増設計画に伴い、中国電力株式会社から増設計画にかかる土地利用の説明があった。島根県教育庁文化財課と鹿島町教育委員会は当該区域内に周知の文化財は確認されていないものの、事前の分布調査が必要であると判断した。また、一矢、輪谷両トンネルの拡幅工事部分についてもあわせて分布調査の依頼があった。

これらの依頼に基づき、平成12年11月21日に町教委、県教委合同で、原子力発電所３号機にかかる開発区域および、一矢、輪谷両トンネルの拡幅工事部分の分布調査をおこなった。この結果をもとに、平成12年12月４日付で町教委から、内カネ谷土捨場については造成区域内には文化財は所在しないものの、周辺に古墳候補地がある旨回答し、また、深田地区土捨場予定地には遺跡が所在する可能性がある地形であったので試掘調査の必要があることを回答した。また、一矢、輪谷両トンネルの拡幅工事部分には埋蔵文化財は認められなかったので、その旨回答した。ただし、内カネ谷土捨場予定地は下草の繁茂が著しく、これ以前の町教委の分布調査によって、古墳候補地があることは把握していたが、土捨場とこの候補地については、この時点では詳細を明らかにできなかった。残土処理の工事ではこの古墳候補地までは土砂の流入は行なわれない計画であったので、工事にあたっては重機等工事車両が進入しないよう、求めるにとどめた。深田地区土捨場予定地については、平成13年２～３月に中国電力からの受託事業として、試掘調査を実施した。

この後、内カネ谷土捨場予定地を区画するフェンス新設計画が具体化し、古墳候補地に及ぶおそれがあることから、中国電力からの依頼に基づいて、平成16年５月11日に、内カネ谷土捨場予定地を町教委、県教委で再度分布調査を行い、古墳１基を確認した。計画されていた土捨場を区画するフェンス工事では、古墳の裾部分が掘削されるおそれがあったため、この部分について発掘調査の必要があると判断した。この古墳は字名を冠して寺床谷古墳とした。

平成16年７月16日に中国電力株式会社とこの寺床谷古墳調査の委託契約を締結し、発掘調査を実施するところとなった。

調査は、平成16年７月21日に調査前の地形測量に着手し、７月26日から発掘調査を開始した。調査では、フェンス設置およびケーブル管路埋設が予定されている部分、幅１ｍ、延長約16ｍを発掘した。結果、遺構、遺物の出土はなかった。７月30日に県教委の調査指導を受け、調査を終了した。

調査では遺構、遺物を検出しておらず、古墳の墳丘を外れた地点と考えられ、県教委とも協議し、当該地での工事はやむをえないものと判断し、その旨、8月17日付で、中国電力宛に回答した。

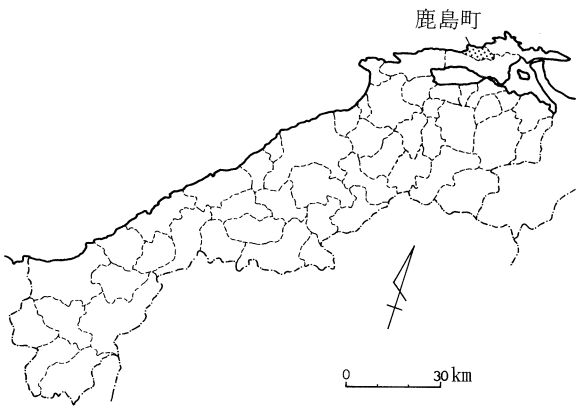


図１　鹿島町位置図

Ⅱ．位置と歴史的環境

寺床谷古墳は、島根県八束郡鹿島町大字御津字寺床谷2032－１に所在する。地目は山林である。この周辺では、島根半島東半の山塊が、急峻な海蝕崖をなして日本海に臨んでいるが、この海岸沿いに点在する集落は、わずかな緩傾斜地を選んで立地しており、御津の集落もこういった集落のひとつである。海に向かって降る緩やかだが狭い傾斜面に人家が密集して集落をなしている。この集落の三方を囲む丘陵上には、秋葉山古墳群[1]、的松古墳群など箱式石棺を主体部とする古墳が点在することが知られている。1985年に調査を行った、集落北東の丘陵の末端近いわずかな傾斜面に位置する中の津古墳[2]もこうしたものの一つと考えられる。中の津古墳の標高は52mで、この地点からは日本海への眺望にすぐれているが、御津の集落はその北部をわずかに望むことができるにすぎず、海上からの眺望を意識してつくられた古墳といえる。これらの古墳や講武地区の奥才古墳群[3]をはじめとする古墳群を含めて、石棺や木棺の多くは、礫床をもっているが、その礫は多くが黒色頁岩からなっており、この御津の海岸で採取されたものと考えられる。また、さかのぼって弥生時代前期には、南講武に所在した堀部第１遺跡[4]の墳墓標石には、講武盆地内では産出しない閃緑岩が数多く使用されており、この御津海岸周辺から運ばれたと予想されてもいる。

そのほかにも、海岸沿いには、偏平な石材が露出し、箱式石棺を内蔵すると考えられる有丸山（ありまるやま）古墳群、割石積みの便化した石棺式石室ともいえる横穴式石室をもつ中広手（なかひろげ）古墳、大形の石材が露出する銭神古墳などが知られている。これらの古墳は、中の津古墳同様、集落から仰ぎ見るのではなく、海上からの眺望を意識しているものであろう。便化した石棺式石室をもつ中広手古墳は、海岸線が近い低地に立地しており、こうした古墳のなかでは特異な立地である。寺床谷古墳も御津の集落を大きく西にはずれた場所にあり、海上からの眺望を強く意識した古墳といえる。

また、御津集落周辺では、1984年度調査を行った御津貝塚横穴群[5]の他、茶畑横穴群など、10数穴以上の横穴が群集する地域としても知られている。しかし、この御津地区では古墳時代を遡る時代の遺跡の存在は知られていない。また、集落遺跡についても全く知見がないが、古墳や横穴墓の分布する様子からは、現在の集落と立地を同じくした集落が存在したことは疑いえない。

８世紀代の様相を描いた『出雲国風土記』には、この御津の集落は島根郡加賀郷に含まれる「廣さ二百八歩」（370m）の「御津濱」として現われ、この浜には「百姓の家」があり、「御津社」を祀っていたことが描かれている。また、現在小島と呼ばれる御津漁港北西の島も、「三島」とみえる。10世紀代の『倭名類聚抄』でもやはり島根郡加賀郷に含まれており、平安時代には延暦寺領が置かれ、「三津厨」と文書にみえる。

中・近世に至ると、御津経塚、御津宝篋印塔といった遺跡が知られるほか、文書の記録によれば、この集落は漁業だけでなく、船便を利用した交易の舞台ともなっている。近世には水浦村と称し、松江藩領であった。集落は、家屋が密集するため、1747（延享４）年、1782（天明２）年、1784（天明４）年、1847（弘化４）年、1851（嘉永４）年には火災のため、多くの家屋が焼失し、1778（安永７）年には豪雨で家屋のほとんどが流出するなど、災害を被った記録が残る。

近代には御津浦という村名であったが、1889（明治22）年からは御津村と変え、1896（明治29）年にはそれまで属していた島根郡から八束郡に移っている。戦後、1956（昭和31）年に他の３町村と合併し、鹿島町の大字の一つとして現在に至っている。

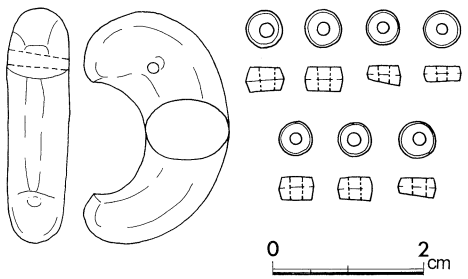


図２　秋葉山３号墳出土玉類

1．寺床谷古墳
2．有丸山古墳群
3．中広手古墳
4．銭神古墳
5．秋葉山古墳
6．的松古墳
7．中の津古墳
8．御津貝塚横穴群
9．茶畑横穴群
10．堀部第1遺跡
11．奥才古墳群
12．佐太講武貝塚
13．古浦砂丘遺跡
14．佐太前遺跡
15．北講武氏元遺跡
16．志谷奥遺跡
17．稗田遺跡
18．名分塚田遺跡
19．南講武大日遺跡
20．南講武草田遺跡
21．南講武小廻遺跡
22．南講武小廻第2遺跡
23．名分丸山古墳群
24．鵜灘山古墳群
25．岩屋古墳
26．向山古墳
27．雉ヶ崎荒神古墳
28．堀部古墳群
29．面目古墳群
30．狐堀古墳
31．尾坂古墳群
32．多久神社裏山古墳群
33．岩鼻古墳群
34．恵谷横穴群
35．氏穴遺跡
36．本郷本谷遺跡
37．後谷遺跡
38．池頭遺跡
39．下谷遺跡
40．池平城跡
41．御津経塚
42．御津宝篋印塔

図3　調査地と周辺の遺跡（1／50000）

Ⅲ. 調 査 の 概 要

調査地周辺は日本海に面した丘陵上で、この丘陵はかなりの傾斜で北に降り、海に近い地点からは急峻な海食崖をなして日本海に落ち込んでいる。現在の御津集落からかなり西方に位置し、同集落から直接目視できる位置ではない。一方、御津集落のおこりは、現在よりもかなり西方にある室津の浜にあったという伝承があり、実際、有丸山古墳群、銭神古墳は、御津集落をかなり西にはずれ、室津、中広手の浜を見下ろす場所に所在し、中広手古墳は、海抜数mの海岸に立地する横穴式石室である。これらの古墳の周辺には、わずかながら平坦地があって、谷奥からの湧水もあり、小規模な集落遺跡の存在を予測させる地形があって、もと集落があったという伝承を裏付けるかのようである。こうした旧集落に関係する遺跡の一つがこの寺床谷古墳と考えられる。これらの古墳は、海上からの眺望にすぐれていたり、海岸に立地するなど、海を強く意識した位置にあるのが特徴といえる。

寺床谷古墳は、丘陵尾根をわずかに西に降った標高117m前後の地点に位置する。この場所からは、北西方向への眺望がすぐれている。付近は尾根筋に近く、わずかに傾斜が緩やかとなっている。

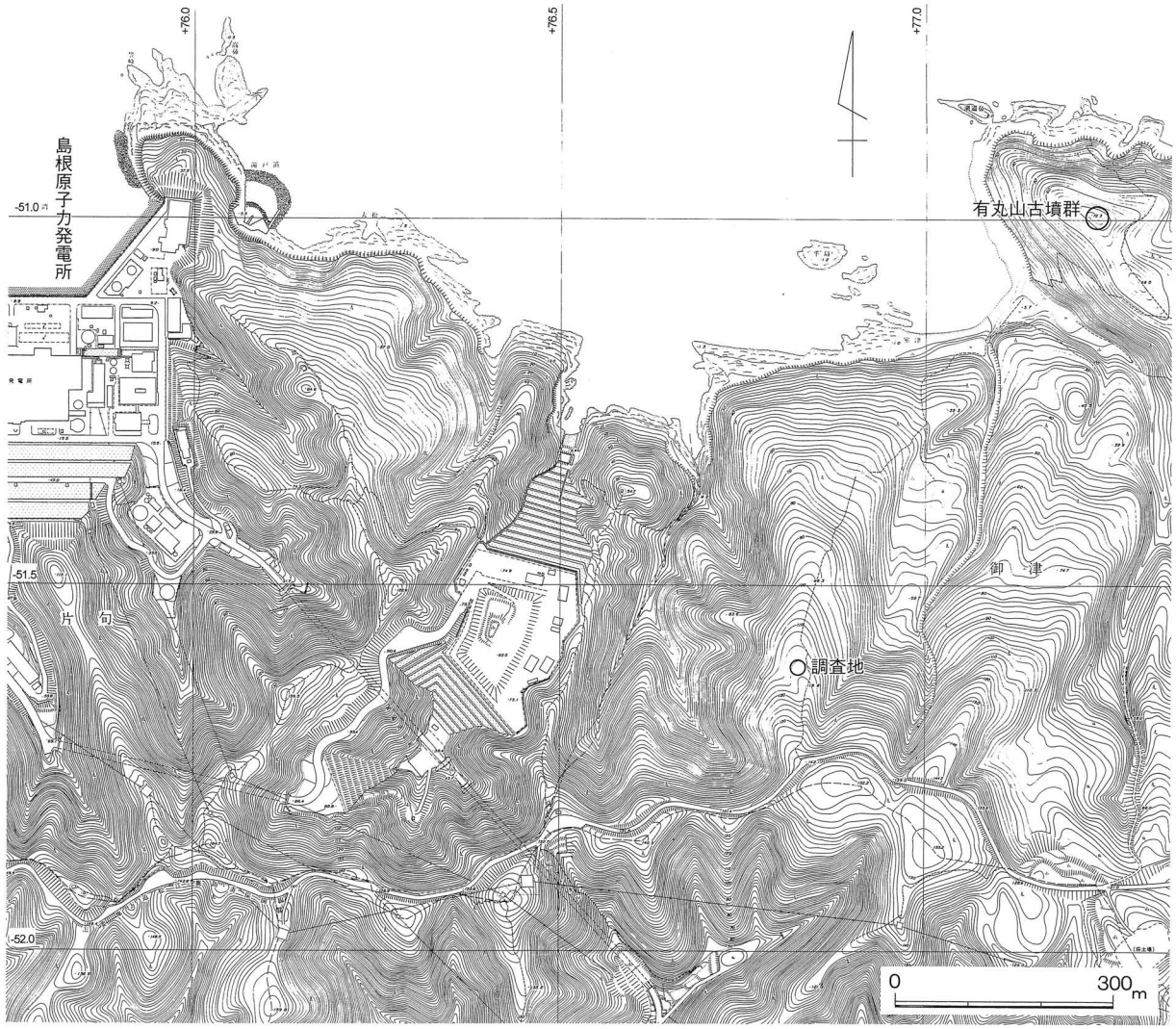


図4　調査地周辺の地形（1／10000）

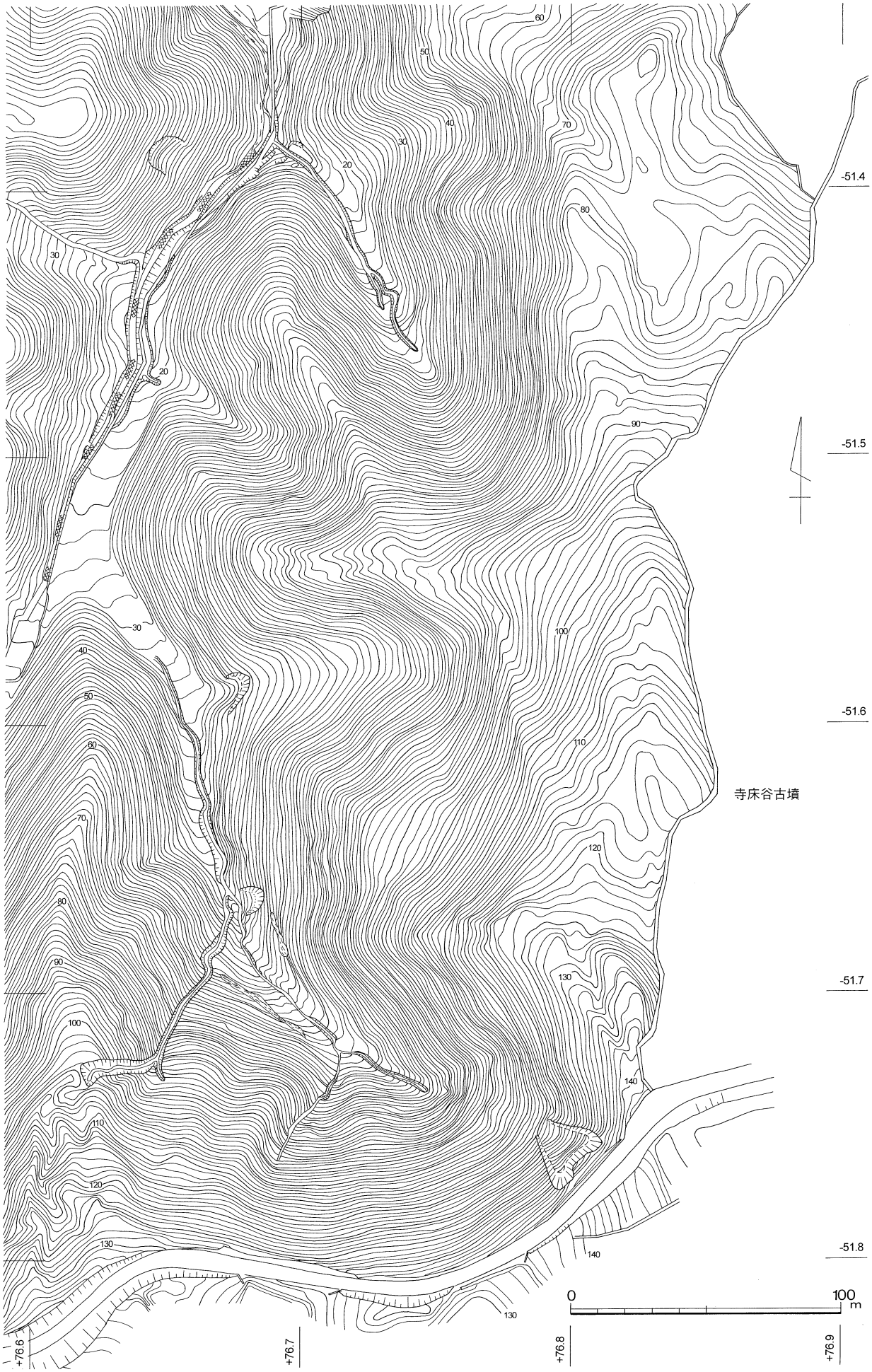


図 5　寺床谷古墳周辺図（1／2000）

この地点から西側は急傾斜の斜面となって、内カネ谷の沢筋に降り、東側ではやはり急斜面で寺床谷に降っている。

墳丘は、現状では地ぶくれ状を呈し、墳形は不明である。規模は、さしわたし約15m前後と推測される。北西の裾からは比高約２ｍを測るが、南側の裾からはそれほどの高さはない。墳頂の標高は約118mである。古墳の主体部を推測させるものは現状では見当たらない。また、埴輪、葺石など墳丘の外表施設も認められない。

この古墳の西側の裾で、フェンスの設置およびケーブル管路埋設が予定されている部分、幅１ｍ、延長約16mを発掘した。このトレンチでは、淡黄褐色土が地山上に約10～20cmの厚さで堆積していた。地山となっている基盤層は、覆土と同色の淡黄褐色の軟岩であった。調査区は、古墳の裾部分に相当する個所と考えられたが、墳丘との関係を示す傾斜の変換や、周溝などの遺構は認められなかった。また、遺物の出土もなかった。

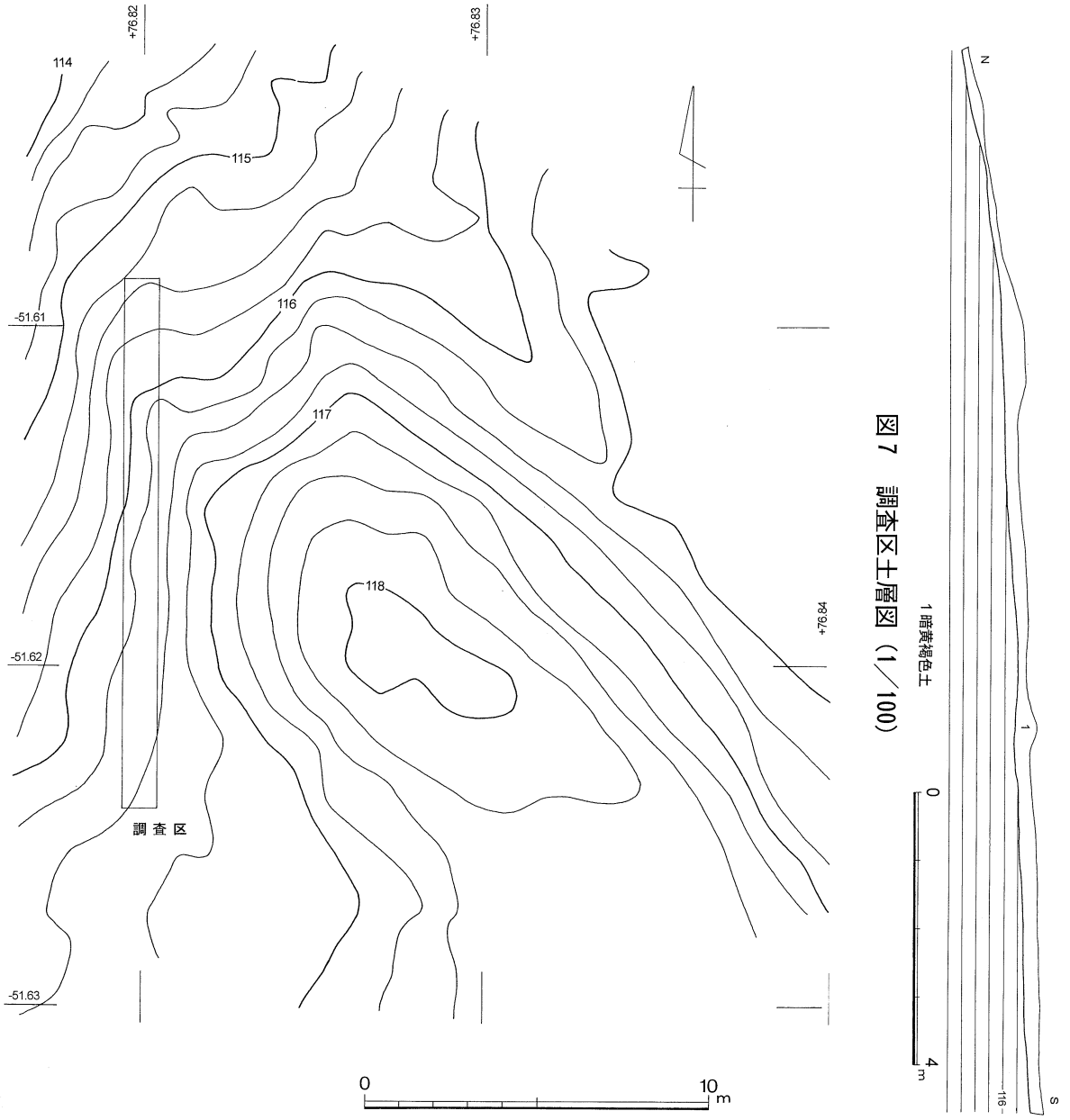


図６　寺床谷古墳測量図（1／200）

図７　調査区土層図（1／100）

付　平成12年度 深田土捨場予定地試掘調査

島根原子力発電所３号機の増設計画に伴い、平成12年11月 町教委、県教委合同で、原子力発電所３号機にかかる開発区域の分布調査をおこなった。この結果、平成12年12月４日付で、内カネ谷土捨場については周辺に古墳候補地がある旨回答し、また、深田地区土捨場予定地には遺跡が所在する可能性がある地形であったので試掘調査の必要があることを回答した。このうち深田地区土捨場予定地では、平成13年２～３月、中国電力島根立地調査事務所からの受託事業として、試掘調査を実施した。調査地は、鹿島町大字佐陀本郷285－１、287、288、290－２、2883、2885番地の計62㎡である。鹿島町教育委員会赤澤秀則を担当者として調査を行った。

調査は、３×２ｍの試掘坑を５個所、５×２ｍの試掘坑を３個所設定して行い、現地調査は、平成13年２月20日から３月12日までの間である。

調査地として、土地所有者平塚 弘、平塚富五郎、井上耕一、平塚一美、平塚岩次郎、平塚管一の各氏に試掘調査の承諾をいただき、深田茶業組合からは、農業資材保管施設を作業小屋として提供いただいた。中国電力株式会社島根立地調査事務所には調査に際しての種々の労をとっていただいた。また、島根県教育庁文化財課池淵俊一氏には、現地での調査指導をいただいた。現地作業には、安達善也、井上忠志、伊藤静香、草本京子、佐藤一男の各氏の参加を得た。

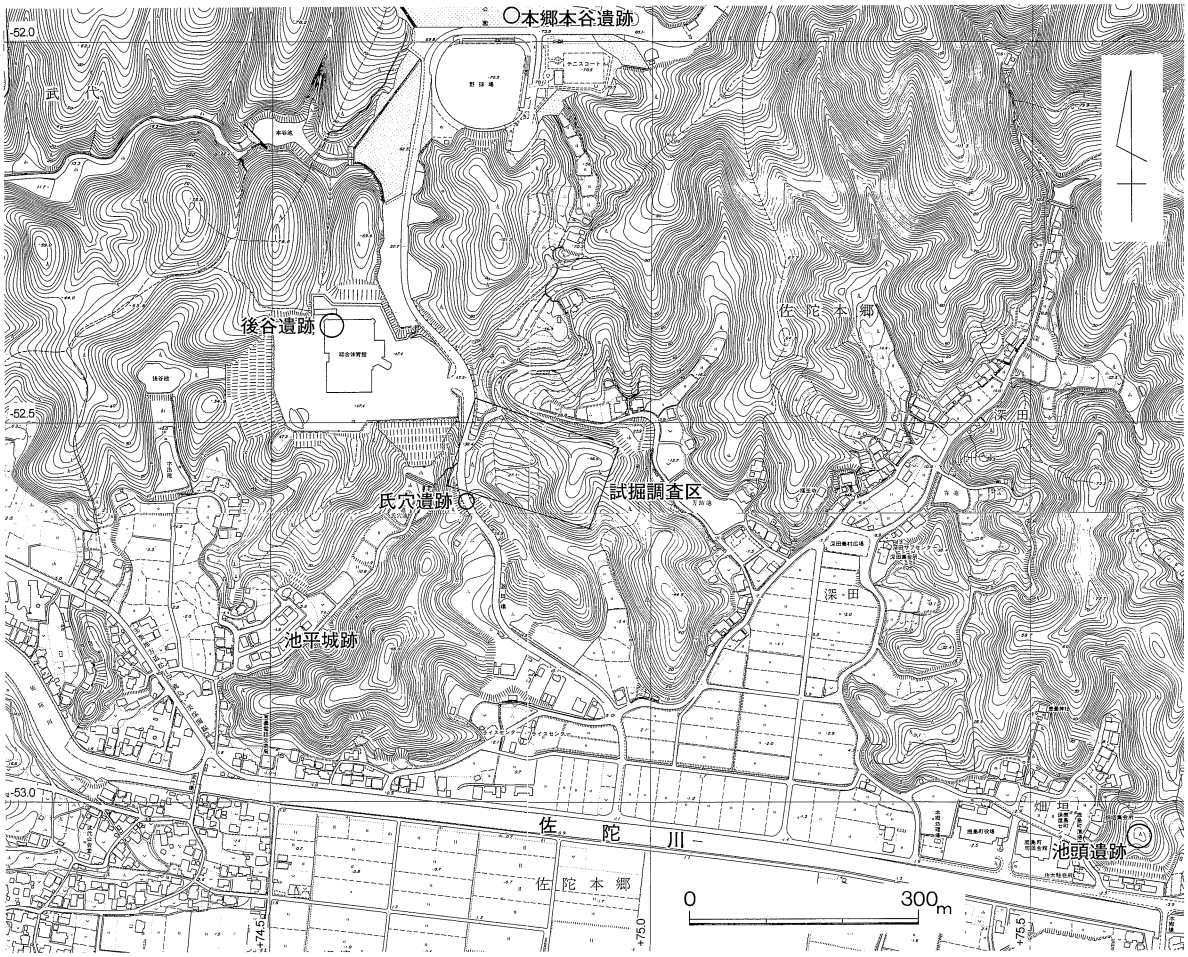


図８　試掘調査地周辺の地形（1／10000）

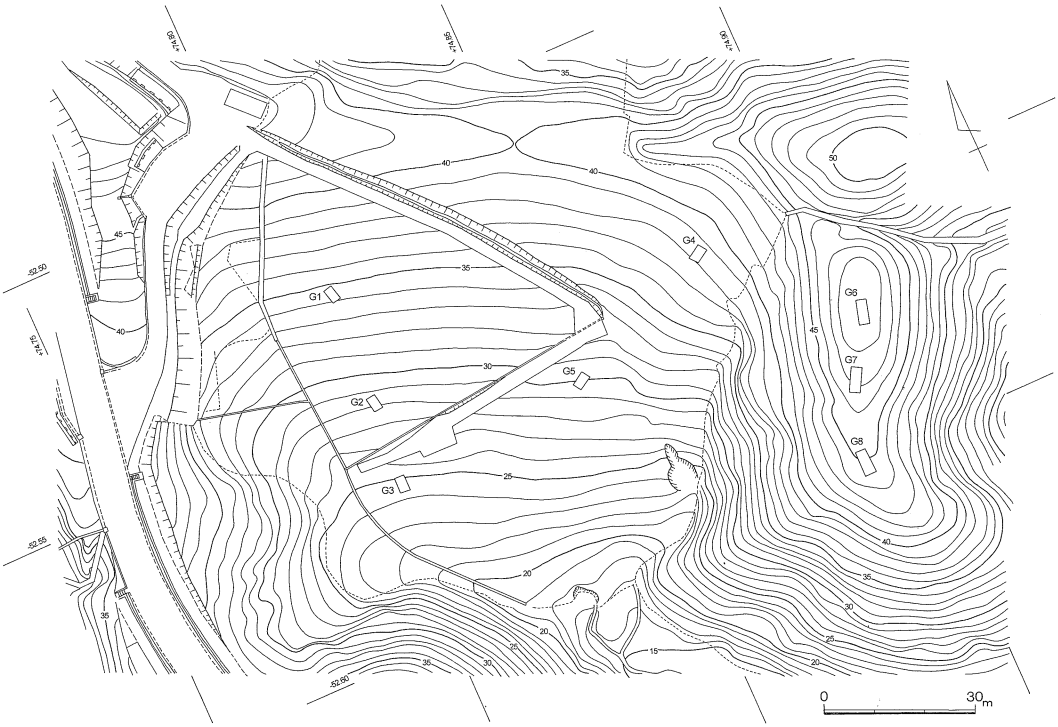


図 9　試掘調査区配置図（1／1500）

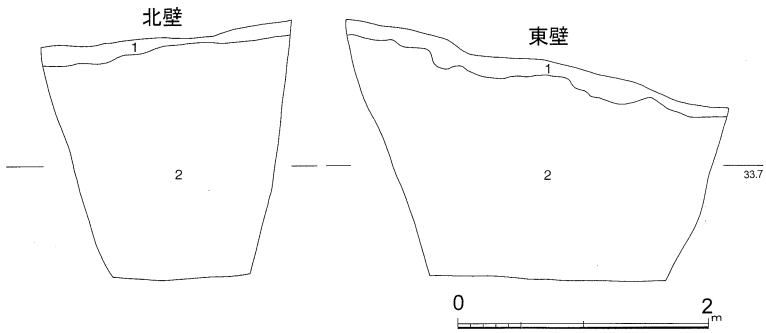


図10　第 1 調査区（1／60）

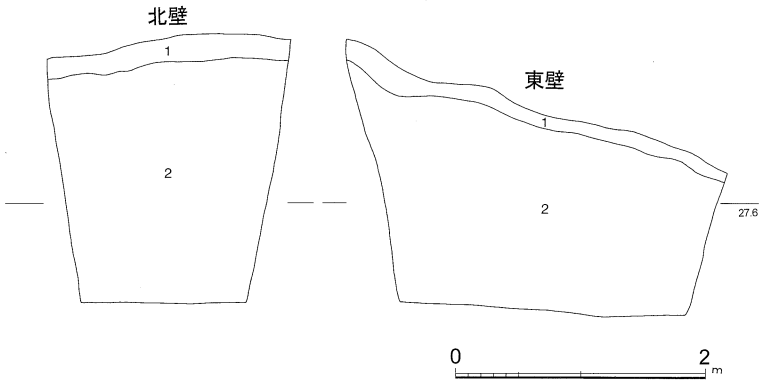


図11　第 2 調査区（1／60）

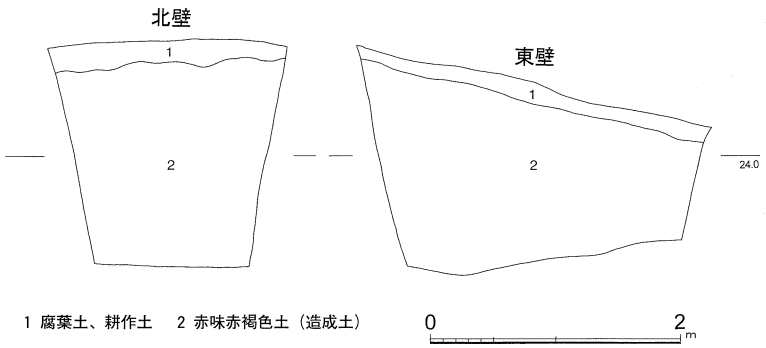


図12　第 3 調査区（1／60）

調査の概要

調査地周辺には隣接して、中世の山城である池平城跡と池平城跡北 1 郭で、柵列などを検出した氏穴遺跡[6]、中近世の掘立柱建物群を検出した本郷本谷遺跡[7]、近世の墳墓群、古墳周溝、多数の柱穴群などを検出した後谷遺跡[8]などがあるうえ、当該地には標高20～40mにかけての緩斜面と40～50mの緩やかな尾根があって、佐陀本郷の平野も近く、遺跡の存在が予想されたのである。第 1 から第 5 の調査区は、茶園がある緩斜面に調査区を設け、第 6 から第 8 の調査区は丘陵尾根上に設けた調査区である。

第 1 調査区　3 × 2 mの調査区で、調査前の標高は34.5mである。深さ 2 m近くまで掘り下げたが、茶園造成時の盛土である赤褐色土を掘り抜くことができ

ず、これ以上の掘削は危険と判断して断念した。出土遺物はなかった。

第2調査区　3×2mの調査区で、調査前の標高は29.0mである。やはり深さ2m近くまで掘り下げたが、茶園造成時の盛土である赤褐色土で、これ以上の掘削は断念した。出土遺物はなかった。

第3調査区　3×2mの調査区で、調査前の標高は24.0mである。深さ2m近くまで掘り下げたが、茶園造成時の盛土である赤褐色土で、これ以上の掘削は断念した。下層では湧水があった。出土遺物はなかった。

第4調査区　3×2mの調査区で、調査前の標高は38.7mである。耕作土直下に地山の軟岩がすぐに認められ、第1～第3調査区とは逆に茶園造成時に掘削され、造成土が搬出された地点と考えられる。出土遺物はなかった。

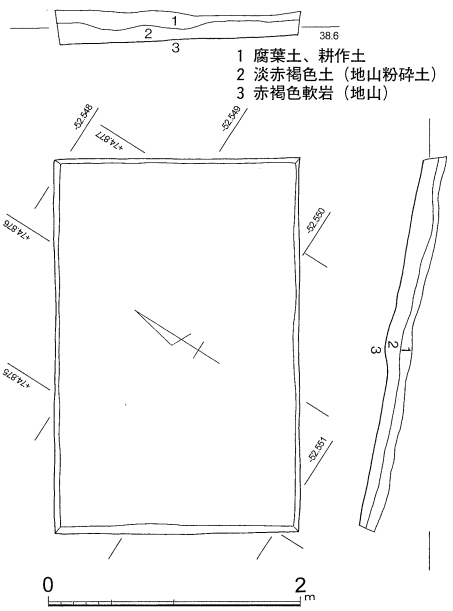


図13　第4調査区（1／60）

第5調査区　3×2mの調査区で、調査前の標高は30.0mである。耕作土直下に地山の軟岩がすぐに認められ、この面に掘り込まれた「T」字に交わる溝を検出した。この溝は遺構の可能性があるため、県教育委員会の指導も得て、約2㎡を拡大して追求したが、明瞭な遺構とはならなかった。溝の覆土は、いずれも地山の軟岩を粉砕した砂質土でよく締まっていた。遺物は出土しなかったので、時期は特定できないが、近代の畑作に伴うものかとも考えられる。

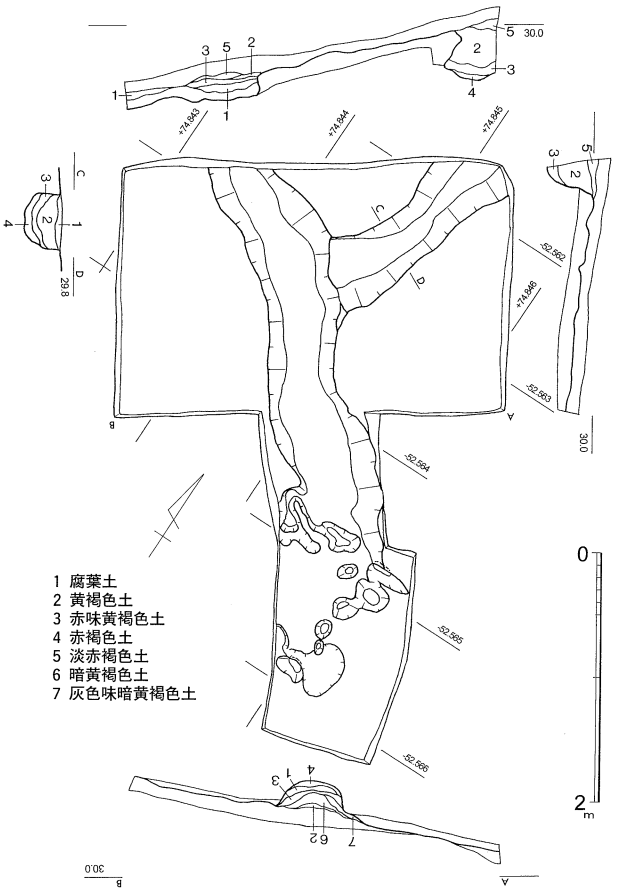


図14　第5調査区（1／60）

第6調査区　尾根上に設定した5×2mの調査区で、調査前の標高は38.8mである。調査区南東隅で、表土下に地層の乱れが認められたので、サブトレンチを設定して観察したが、変則的な土層の堆積を見せ、風倒木の痕跡と考えられ、遺構ではなかった。出土遺物はなかった。

第7調査区　尾根上に設定した5×2mの調査区で、調査前の標高は47.4mである。地表の斜面部の傾斜そのままに地山面が検出され、遺構はなかった。出土遺物も認められなかった。

第8調査区　尾根上に設定した5×2mの調査区で、調査前の標高は45.5mである。ここでも地表の斜面部の傾斜そのままに地山面が検出され、遺構はなかった。出土遺物も認められなかった。

以上の結果から、遺構、遺物は検出されなかった。第1から第5調査区を設定した茶園は、茶園を造成した際に大規模に地形が改変されていることを確認した。茶園造成前にはかなり急峻な斜面であったと推測される。一方、第5調査区のように溝状のものが検出された調査区もあり、これについては調査範囲を拡張したが、遺構とは判断しかねた。近代の畑作に伴うものかとも考えられる。

試掘調査地では、以上のように、遺跡は存在しないものと判断されたので、県教育委員会とも協議のうえ、平成13年3月30日付けで、中国電力島根立地調査事務所宛に当該地での造成事業実施は差し支えないものと判断するむね、回答した。

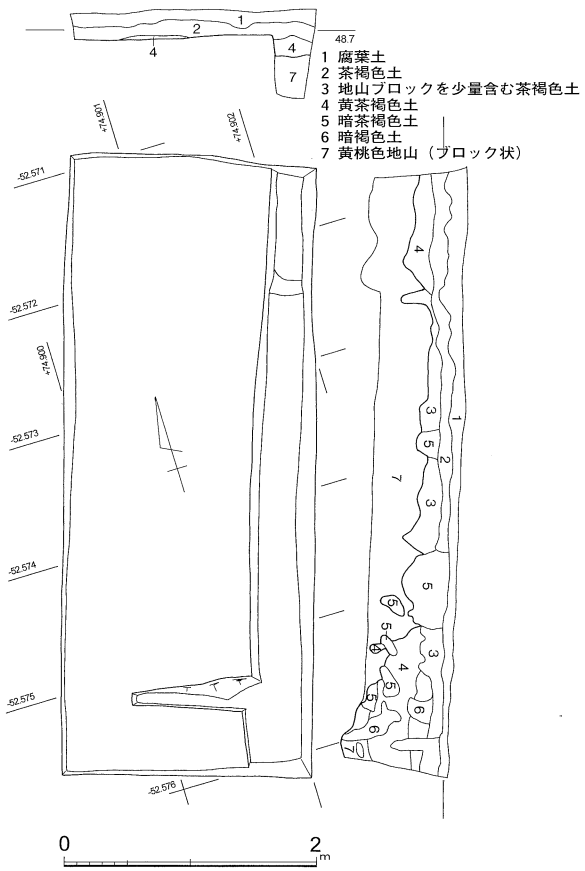


図15　第6調査区（1／60）

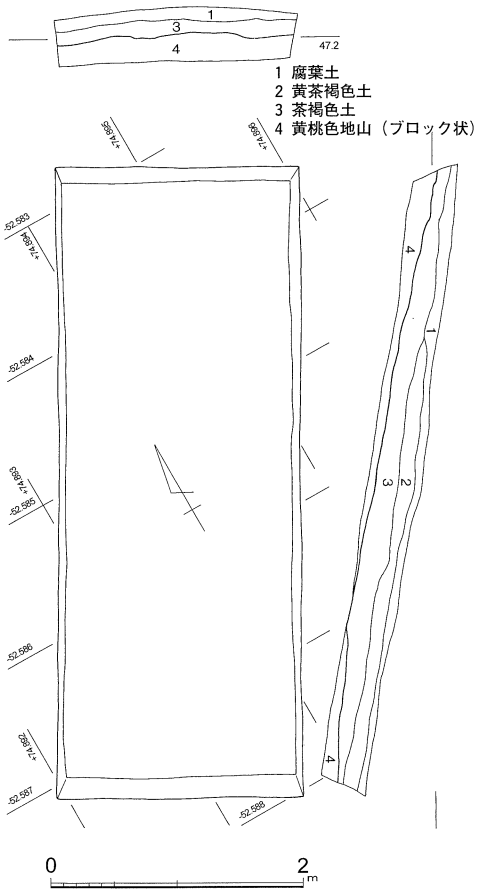


図16　第7調査区（1／60）

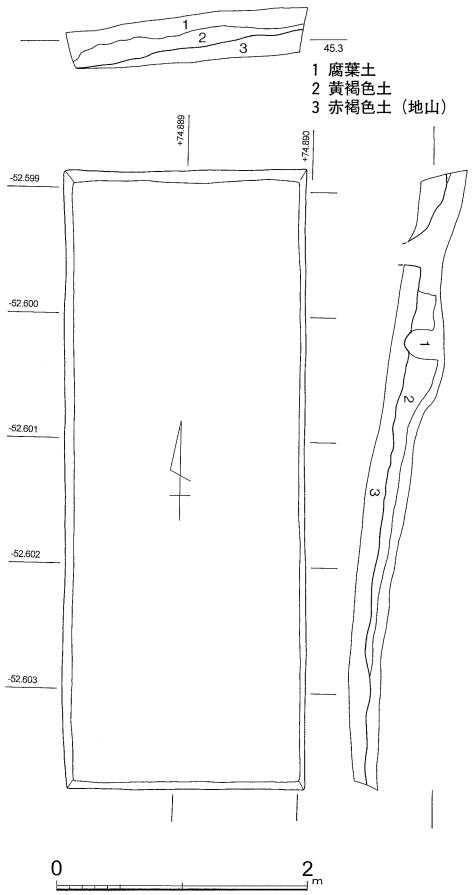


図17　第8調査区（1／60）

Ⅳ．小　　結

寺床谷古墳は、御津集落をかなり西にはずれ、周辺に古墳を築造する基盤が認めにくい立地である。しかし、御津地区の古墳のうち、有丸山古墳群、銭神古墳は、やはり御津集落をかなり西にはずれ、室津、中広手の浜を見下ろす場所に所在し、中広手古墳は、海抜数mの中広手の海岸に立地する横穴式石室である。これらの古墳の周辺には平坦地があって、谷奥からの湧水もあり、小規模な集落遺跡の存在を予測させる地形があって、室津には古く集落があったという地元の伝承を裏付けるかのようである。

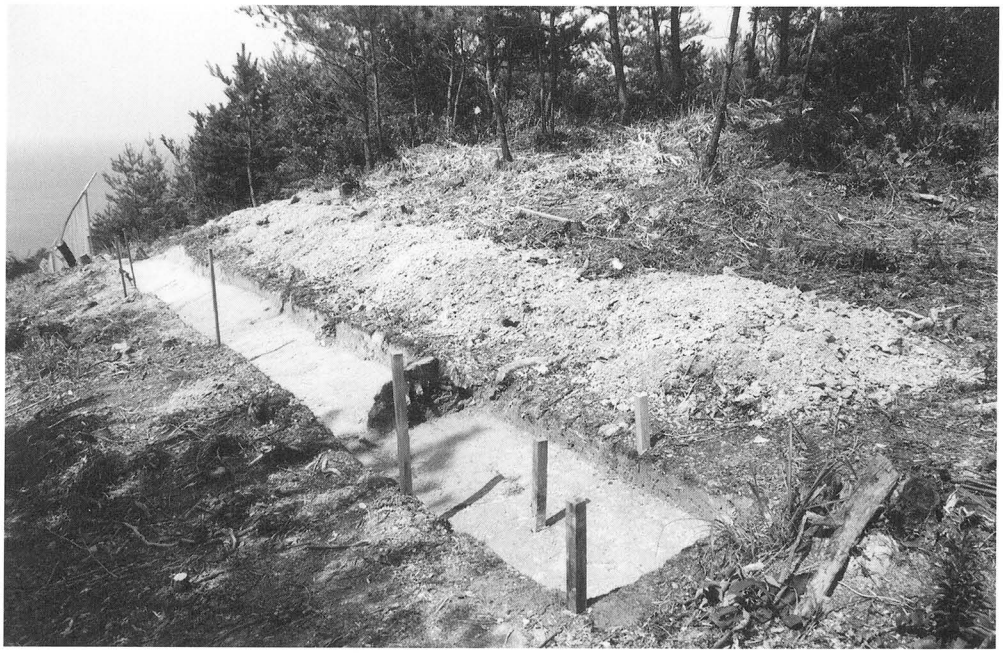
こうした旧集落に関係する遺跡の一つが、この寺床谷古墳と考えられる。現状では地ぶくれ状を呈し、墳形は不明で、詳細は今後の調査に待つほかないが、日本海に面しては急峻な断崖の続く島根半島にあって、水が出て、接岸できる浜の存在は、当時の人々にとって漁業・交易の両面で、重要な場所であったといえよう。寺床谷古墳も含め、これらの古墳は、海上からの眺望にすぐれていたり、海岸に立地するなど、海を強く意識した位置にあるのが特徴といえる。

一方、講武盆地につくられていた弥生前期の集団埋葬である堀部第１遺跡の墳墓標石として、御津付近から閃緑岩が選択的に運び出されていること、やはり講武盆地を中心に古墳時代前半期の古墳に御津地区の海岸で採集されたと考えられる海岸礫を礫床として敷き詰めていること、『出雲国風土記』にみえる佐太大神の生まれた場所が「加賀の神埼」（島根町；海岸の海食洞）であるとされること、潮流の関係で秋口から初冬に漂着する南方産のエラブウミヘビやセグロウミヘビが「竜蛇さん」と呼ばれ、佐太神社や出雲大社神在祭に神々の先触れとして現在でも奉納されていることなど、時代を超えて海に関連する信仰の存在が指摘できる。島根半島中央部の古墳の多くが礫床をもち、同様の「奥才型木棺」[9]と呼んだ主体部をもつ古墳が日本海沿いの北部九州、島根半島、但馬、丹後に限定して認められるのは、日本海をなかだちとしたネットワークの存在を前提条件に、何らかの祭祀の共有がなければ成立しえないことを島根半島海岸部の古墳の今後の課題として確認し、結びとする。

1．『県営林道澄水山線開設事業に伴う御津貝塚横穴群発掘調査報告書Ⅰ』 鹿島町教育委員会 1984年
2．『県営林道澄水山線開設事業に伴う御津中の津古墳発掘調査報告書』 島根県松江農林事務所・鹿島町教育委員会 1985年
3．『奥才古墳群』鹿島町教育委員会 1985年、『奥才古墳群第８支群 県道御津東生馬線改良工事に伴う調査』島根県松江土木建築事務所・鹿島町教育委員会 2002年
4．『堀部第１遺跡 鹿島町福祉ゾーン整備事業に伴う調査１』鹿島町教育委員会 2005年刊行予定。
5．『県営林道澄水山線開設事業に伴う御津貝塚横穴群発掘調査報告書Ⅰ』 鹿島町教育委員会 1984年
6．『島根原子力発電所２号機資材運搬道路新設に伴う氏穴遺跡発掘調査概報』鹿島町教育委員会 1983年
7．『島根原子力発電所２号機土捨用地新設に伴う本郷本谷遺跡発掘調査報告書』鹿島町教育委員会 1984年
8．鹿島町教育委員会1995年調査。
9．『奥才古墳群第８支群 県道御津東生馬線改良工事に伴う調査』 島根県松江土木建築事務所・鹿島町教育委員会 2002年

寺床谷古墳遠景（南から）

寺床谷古墳調査前
（南西から）



調査区（南西から）

図版 2

調査風景（南東から）

調査区（北から）

調査指導（県文化財課）

深田土捨場予定地
調査前全景
（西から）

第 1 調査区（南西から）

第 2 調査区（南西から）

図版 4

第 3 調査区（南西から）

第 4 調査区（西から）

第 5 調査区（南から）

第 5 調査区拡張部
（西から）

第 6 調査区（南西から）

第 7 調査区（南西から）

図版 6

第 8 調査区（南西から）

調査風景（第 6 調査区）

調査指導（県文化財課）

報 告 書 抄 録

ふりがな	てらどこだにこふん　ちゅうごくでんりょくしまねげんしりょくはつでんしょうちカネだにフェンスせっちこうじにともなうちょうさ
書　　名	寺床谷古墳　中国電力島根原子力発電所 内カネ谷フェンス設置工事に伴う調査
編著者名	赤澤秀則
編集機関	鹿島町教育委員会
所 在 地	〒690-0396 島根県八束郡鹿島町大字佐陀本郷640－1 0852-82-3211
発行年月日	西暦2004年12月15日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
寺床谷古墳（てらどこだにこふん）	島根県（しまねけん）八束郡 鹿島町（かしまちょう）大字御津（おおあざみつ） 字寺床谷（あざてらどこだに）2032-1	32301		35度 31分 53秒	133度 0分 49秒	20040721 ～ 20040730	16	原子力発電所増設に伴う土捨場の拡張による

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
寺床谷古墳	古　墳	古墳時代	なし	なし	

寺　床　谷　古　墳

中国電力島根原子力発電所 内カネ谷フェンス設置工事に伴う調査

２００４年１２月 発行

発行　鹿島町教育委員会
島根県八束郡鹿島町大字佐陀本郷640－1

印刷　柏木印刷株式会社
島根県松江市国屋町452－2